

黄春明「莎啞娜啦・再見」に描かれる記憶 とアイデンティティの形成

西 端 彩

1. はじめに

台湾の国宝級作家と称される黄春明（1935-）の作品の中で、日本において最も有名なものは1979年に刊行された「さよなら・再見（莎啞娜啦・再見）」¹⁾であろう。筆者のもとにあるテキストの奥付には、「第三刷発行 一九七九年十一月三〇日」と記され、初版が9月だったことを考えると、短期間に版を重ねるほどのヒットを記録したことがうかがえる。この日本人の買春観光を描いた台湾の文学作品が日本の読者に与えた衝撃は大きかったといえよう。たとえば次のような反響があった。刊行後まもなくの10月28日の『朝日新聞』「読書欄」には「決して深刻にはなく、軽過ぎるくらい軽妙に書かれた一編なのだが、それだけにむしろ面白いとは言い切れぬ苦い後味が残る。日本人のまだ書いたことのない日本人像がここにある」という読者の感想が掲載された。しばらくして作家の群ようこは自身の外国文学の読書エッセイの中で「さよなら・再見」を取り上げた。高校生時代に同級生の父親がアジアの国で買春観光をしていたことに触れ、「さよなら・再見」に登場する日本人男性を軽蔑しつつも、「それが自分の身内だったら、いったいどう感じるだろう」とその娘の視点に立ち、「情けなくみっともない日本人のおじさんたちが出てくるこの本」と紹介している。²⁾

日本においても、もちろん台湾においても、台湾での日本人による買春観光の実態を風刺的に描く小説として読まれてきた「莎啞娜啦・再見」だが、筆者がこの小説において注目するのは主人公「黄君」である。彼は日本統治期の後

期に生まれ、戦後は中国から遷台した国民党政権の統治下で教育を受けてきた世代だと推定される。現在は故郷を離れて台北でサラリーマンとして働き、仕事のために習得した日本語を自由に操ることができる人物だ。名前から作者である黄春明を想起させ、作中に見られる「黄君」のアイデンティティや心の葛藤の様相は、黄春明自身が経験した戦後の国民党主導下における台湾の歴史記憶の形成過程と「日本」（日本統治期と戦後の台湾に存在する日本）が大きくかかわっていると考えられる。本稿では、まず1970年代初頭における国民党政権の歴史観に基づく記憶がどのようなものであるか、またどのように集团的記憶として形成され、共有されたかを整理し、「莎喲娜啦・再見」においてその記憶がどのように語られ、「黄君」のアイデンティティ形成に影響したのかを考察する。さらに、小説だけでは読み取れない部分については、映画版『莎喲娜啦・再見』（1987）も参照しながら考察したい。

2. 歴史記憶の形成とその過程

小説「莎喲娜啦・再見」は1973年8月に『文季』（1974年8月まで全3期）の創刊号に掲載された。尉天驄（1935-2019）らが中心となって創刊されたこの文芸雑誌は、黄春明を含めた新しい台湾文学作家を多数輩出することになる『文学季刊』（1966年10月創刊、全10期）の流れをくむものであり、当時の文化潮流の一端を担う雑誌媒体であった。

1970年代初期の台湾では、釣魚台事件、国連脱退、日中国交正常化（日台断交）など一連の外交上の挫折を契機として、知識青年層を中心に「郷土回帰」文化潮流が起こっていた。そうした中で『文季』は「郷土回帰」の潮流に対して三つの方向性を具体的に示した。一つには、1960年代台湾における文学潮流であった現代主義（モダニズム）文学への批判、二つには社会批判意識の強い郷土小説の創作、三つには日本統治期台湾新文学に関する検討である。創刊号には唐文標（1936-1985）による台湾現代詩を批判する文章や、また1960年代に活躍したモダニズム作家欧陽子（1939-）の小説を批判する文章も掲載され、現実に即した文学作品の創作を主張した。その中で社会批判意識の強い郷

土小説として登場したのが、黄春明「莎啞娜啦・再見」なのである。³⁾

「莎啞娜啦・再見」について、蕭阿勤は「彼が作風をはっきりと転換させたことを具体的に世に示した。黄春明は六〇年代後期から、温かさに満ちた筆致で地方の小村に生きる下層の苦難にまみれた市井の人間を描いてきたが、七〇年代初めに至って、強烈な社会批判意識に従って、都市生活とそこに生きる人々を描き出す方向へ転換したのである」⁴⁾と評している。

次に、1970年代初めの台湾において、国民党統治下に義務教育を受けた世代の歴史記憶はどのようなものだっただろうか。

洪郁如は「中国の抗日戦争による「国仇家恨（国家を侵略され家庭を壊された恨み）」という台湾外部からの集合的記憶が、義務教育を通して広まった。一九四五年以前から台湾在住のいわゆる「本省人」に向けて、国家の公式的歴史記述モデルは戦前日本教育の経験を持たない民衆層まで浸透していった」⁵⁾、また「国民党の台湾移転後、大陸奪還は最高の国家使命となり、台湾社会において新たな国民統合が展開された。“learning to be Chinese”が歴史記述の主軸となり、正統的な中国史が教え込まれた」⁶⁾と述べ、また日本については「日清戦争以来の国難をもたらした最大の侵略者として位置づけられて」⁷⁾おり、「侵略と虐殺をもたらした八年間にわたる抗日戦争の敵」⁸⁾とみなされたと述べている。

また、蕭阿勤は、「国民党統治下の公共領域中において合理的で正当と見なされる日本統治期の集団記憶の中で、台湾人の「抗日」経験は、「モデル化」され——あるいは「中国化」、もっと突き詰めて言えば「(中国)民族化」されることで、その集団モデルが形成され、そしてきわめて重要な歴史の一部になったのである。事実上、戦後およそ三十年の間、すなわち七〇年代前後の「日本植民地統治期」の集団記憶に関していえば、それはほとんど「抗日」の集団記憶となっていた」⁹⁾と指摘している。

ここまで見てきたように、中華ナショナリズムを中心とする国民党政権下において、日本統治期に生まれ、戦後に教育を受けた世代が共有していた歴史記憶は、直接経験したものではない「抗日」戦争の記憶を内面化させたものであ

た。

そして、黄春明が幼少期を過ごした十年間の日本統治期は、直接経験した歴史にもかかわらず、公式に記述されることもなく、語られることもなかった。黄春明が台湾社会の現実に即した創作を行うにあたって選択したのは、「国家の公式的歴史記述モデル」に接続することによってアイデンティティを形成していく戦後に生きる台湾人の姿を描くことであった。

3. 「莎啞娜啦・再見」における記憶の語りとアイデンティティの形成

3.1 あらすじ

主人公「黄君」は日本語が堪能なサラリーマンである。ある日、会社の社長から日本人の買春観光を手引きするよう命じられ、自身の故郷である礁溪温泉に案内することになる。「中国人」だと自覚する彼は、中学時代の教師から聞かされた日本軍の残虐行為を許せず、かつての植民地である台湾に対して優越感を垣間見せる日本人たちに苛立ちながらも、そのような素振りは見せずに愛想よく対応するが、「矛盾する」自分の姿に苦悩し葛藤を深めていく。

買春が行われる宿では、日本人たちを遠回しに諷めようとするが失敗し、また同胞の女性たちのために日本人から多めに代金を得ようと画策するが、「黄君」自身も顔にあざのある女性に同情して声をかけてしまったことで、彼女を部屋に呼ぶか呼ばないか葛藤した末、酒を飲んで眠ってしまう。

翌日、台北まで戻る列車の中で、一行は偶然に乗り合わせた青年に話しかけられる。その青年は大学で中国文学を専攻しているが、父親のすすめもあって日本に留学して学びたいと話す。それを聞いて、「黄君」は「話が逆じゃないか」と憤り、嘘の通訳によって大学生に日本留学を思いとどまらせるのと同時に、日本人たちに戦争の反省を促すのだった。

3.2 「抗日」記憶の語り

作中では日本統治期に祖父が日本人の暴力によって受けた傷痕と、外省人教師が語る八年間の抗日戦争における日本軍の侵略行為の記憶が「黄君」によ

て同列に語られている。

一個の人間として、また一中国人として、私は中国現代史を身の現実問題として体験してきたので、以前からずっと日本人を憎んでいた。私は昔の事をいろいろ話してくれる祖父が好きだったが、祖父の右足は若い頃日本人にへし折られたそうで、腿から下がなかった。¹⁰⁾

また、中学校に通っていた頃、生徒から尊敬され慕われている歴史の先生がいたが、その先生は授業中に涙を浮かべて私たちに抗戦の歴史を語った。先生は、日本人は“天に代わりて不義を討つ”という軍歌を高唱しながら、我が中国を侵略し、あの醜悪な中国侵略戦争を“聖戦”と名づけて美化し、同時に大陸で数知れぬ多くの罪のない人々を殺したのだと教えてくれた。

(中略)

その時から、もう二十年以上もたって、世は移り、社会も変化した。歴史の先生が使命としてみんなの心に播いた種は、長い時間のたった今になって、やっと芽を出す気配が感じられるものの、まだ発芽するにはいたらないようだ。もしかしたら、みんなのそういう意識はもう時の流れに流されてしまっていて、なくなっているのかもしれない。

しかし、私個人の意識の中では、先生の教えは深く根を張っていて、取り除くことができなくなっている。¹¹⁾

また、「黄君」は日本人観光客を迎える仕事の前に、同僚の前で「新聞記事をもとに極端な民族主義を振りかざして日本人を罵倒したばかり」¹²⁾であり、上述のように周囲の大人たちが語る「抗日」の記憶、また新聞に掲載される「抗日」言説が「黄君」のアイデンティティのよりどころとなっている。

「黄君」が空港に七人の観光客（本稿に登場するのは、馬場、落合、佐々木の三人）を出迎えに行くと、何人かが検査室で足止めにあっていた。来台した七人のメンバーはみな小学校、中学校と同期で、同時期に兵隊として従軍し、現在も一緒に商売をしている仲間だ。「黄君」が「テルアビブ恐怖症」[筆者注：1972年5月に日本人がイスラエルで起こしたテルアビブ空港乱射事件を指す]

のせいで空港の検査が厳しくなっていると説明すると、メンバーの一人が「日本の今の若い連中はまったく無法者同然だ」と言うのを聞いて、「私はこの機会に昔日本人がやったことのケリをつけてやろうと思った。年をとった日本人だって、若い連中に比べて少しも立派だとは思えない。中国侵略の血なまぐさは、歴史から永遠に消し去ることができないのだ」¹³⁾と決意するのだった。

しかしながら「黄君」が「ケリ」をつけられないままツアーは進んでいく。「黄君」は宿でのチェックイン時に日本人たちの生年を確認しており、彼らが中国侵略戦争に参加していたと確信していた。そこで、「黄君」は帰りの列車で大学生が話しかけてきたことを利用して、日本人たちを懲らしめようと思いつく。大学生が日本に留学したいと話すのを、日本人たちが中国侵略戦争に参加したに違いないと話していると偽の通訳で伝えると、それまで昨晚の余韻に浸っていた日本人たちの表情が一変してしまう。

「彼は、皆さんの年齢なら、ちょうど兵隊にとられて、中国侵略戦争に参加したに違いないと言ってます。そうですか」

落合の顔が蒼白になり、馬場はひどく真剣な様子になった。私は笑いながら言った。

「こいつは本当にいやなヤツですよ。しかし、どうってことはありません。

落合さん、あなたはこの話に敏感なようですね」

「そんなことはありませんよ」と彼はちょっと黙って、なにか思い出しているふうだった。「あの頃は、身体の悪い者以外は、若い者は全部召集されて兵隊になったんだ。もちろん俺たちだって例外じゃない」

(中略)

ところが、私が思いもしなかった不思議なことが起こっていた。私には少しばかり歴史の知識があっただけなのだ。ところが意外にも、尊大に大声をだして威張っていた連中が、ただ何度もうなずいて、非を認めたのだ。

(中略)

……佐々木は続けていった。「戦後まもなく、日本ではテレビができた。その初めの頃だったか、昔の、私たちの参加した戦争の記録フィルムを見

たよ」

「中国と戦う場面がありましたか」

「あったよ！あったどころじゃない、とてもたくさんあった」彼は友人たちを見た。「そうじゃなかったか。俺たちはテレビではっきり見たよ、俺たちは結局なにかをやったんだ」

私はなにも知らないようなふりをして聞いた。

「記録フィルムを見たのなら、あなたたちがなにをやったのか、はっきりわかったでしょう？」

「ああ！」

(中略)

「俺たちは南京大虐殺の場面を見たよ。黄浦江に浮く死体も見た。大爆撃も見た。それから……」

「佐々木、もういいよ」馬場が首を横に振りながらいった。「もういい、もういい」

私も、もういい、と思った。彼らは当事者だ。¹⁴⁾

日本人たちに抗日戦争の反省を促すことのできた「黄君」は最後に、「ああ！天のみぞ知る。私はとてもおかしかった」¹⁵⁾とほくそ笑む。この作品の冒頭は「この二日の間に、私は二つ罪なことをしてしまったのだが、思い返してみると、愉快的気持ちが湧いてくるのを抑えきれない」¹⁶⁾と「黄君」の独白から始まる。「二つの罪」とは買春観光の案内役をしたことと、嘘の通訳をしたことを指し、「黄君」はついに「ケリ」をつけることができたが、よりどころとする「抗日」の歴史記憶は周りの大人たちの語りや新聞によって得た「少しばかりの歴史の知識」であることを認めてしまっている。また、「中国人」アイデンティティによって「自尊心」を保つ「黄君」だが、それは個人のものでない、集団的な「抗日」の記憶によって形成されたものであるがゆえ、今回の買春観光中に起きる出来事に対する「黄君」の反応には、しばしば葛藤や揺らぎが見られるのだ。

3.3 「黄君」の葛藤と揺らぐアイデンティティ

「黄君」は日本人による買春ツアーに関わることによって、自身のアイデンティティと、妻と幼子を養わなければならない現実とを天秤にかけ、命じられた仕事を優先して全うするほかないという窮地に追い込まれた。さらには「黄君」にとって日本人たちを案内する温泉宿が自身の故郷であるという現実には「言葉に尽くせないほど苦しい」¹⁷⁾と吐露させるほどのものである。

「黄君」は日本人たちを心の中では軽蔑し、彼らの態度に抵抗し続けるが、それを日本人たちに悟られることなく上手く取り繕い、ときには厳しく、ときにはユーモラスに日本人に対応し、求められた仕事をやり遂げる一方、「抗日」の記憶を自分の中に内面化して「中国人」と自覚するからこそ、日本人に対する自身のふるまいに葛藤し、故郷の現実に対しての無力さを感じ、アイデンティティも揺らぎ始める。

私は日本人を極度に憎んでいるにもかかわらず、生活のためとはいえ、彼らのためにポン引きをやり、何人もの同胞女性を彼らの遊ぶにまかせている。こういう現実が、私の心の中に非常に大きな矛盾を生ぜしめていた。私が道化役者のように、日本人たちと一緒に遊べるだけの年期を積んでいれば、こんな心の中の闘いの苦しみを味わうこともあるまい。こんな心境でどうして女性に心を動かすことができようか。私は暗い、どうしてもなく不愉快な気持ちだった。¹⁸⁾

「黄君」は顔の半面にあざのある女の子が宴会部屋に入るのをためらっているのを見て、自分にサービスするように声をかけてしまったのだ。コンプレックスを抱える彼女を救いたいという正義感からではあるが、自分の部屋に呼ぶことはできず、彼女の心を弄ってしまったのではないかとますます苦悩する。

当時の台湾は経済的な発展を遂げつつあるものの、貧しきゆえに売春婦となる女性も多かった。「黄君」はいざ日本人を相手に商売している同胞女性たちを目の当たりにすると、矛盾した自己の姿が映し出され、「中国人」アイデンティティでは太刀打ちできないという現実をつきつけられて苦しむほかないのである。

ところで、「黄君」が流暢な日本語を話すことができるのは、現実において生きていくため、必要に迫られてのことだと考えられるが、彼にとって日本語はそれだけのものではないことが、次の場面から見て取れる。日本人たちが観光地につくや否や、若い売春婦たちを品定めして自分たちの欲望を満たそうとし、そのうえ彼女たちが普通に話している中国語を聞いて、次のように話し始めたため、感情を抑えきれず次のように口をはさむのだ。

「俺はまた、喧嘩でもしているのかと思ったよ。日本語はとてもきれいに聞こえるんだよ。まあ女性の話す日本語のことだけどね、本当に美しいよ」
落合はとても得意そうにいった。

「それはまず本当のことだ。外国人にもそう感じる人がたくさんいる。黄さんはそう思わんかなあ」佐々木がいい、他の日本人たちもそうだそうだとうなずいた。

たとえ自分をよく知っている賢明な日本人であっても、かつて日本の植民地であった台湾へやってきて、いつもいつも優越感が表に出ないように自分を抑えているのはとてもむずかしいことだ。いわんや、馬場やそのグループのような連中がここに来て、自分の欲望のために金を使って目的を達し、私たちの同胞女性と遊んで、私たちの言葉をけなす話をしているのだ。私はできるだけおだやかに話した。

「そうですね、あなたがたの日本語はあなたがたの包装デザインと同じですね、見た目にはきれいだ。あなたがたが日本語を話すのは耳に聞くと美しいけれど、あなたがたが実際にやることはとてもそうじゃありませんね」¹⁹⁾

「黄君」は日本人が台湾に対して抱いている優越感を察知し、そのうえ日本語の優位性を語る日本人たちが現在は台湾を「経済植民地」として蹂躪し続けていることをこのように皮肉交じりに伝えるが、日本人たちは「黄君」の真意を理解することはない。ところが、「黄君」自身もここでは日本の台湾における植民地統治についてそれ以上は追及できないままなのである。その理由は次章において明らかにする。

4. 映画版『莎哟娜啦・再見』に登場する日本語世代

小説「莎哟娜啦・再見」において「黄君」が日本語を話せるという設定は、日本統治期に生まれ日本語教育を受けたためというよりはむしろ、戦後に習得したものと考えられる。国民党政権下における教育の場では日本語を禁じられたため、日本人たちと対等に話すことができるほどの日本語力を身に付けたのは、日本企業が台湾に進出する1960年代以降のことであろう。とはいえ、日本語は日本統治時代にはもっとも身近な場所、つまり家庭で生きていたものと考えられる。「黄君」の父親は日本統治期に日本語での教育を十分に受けた、いわゆる「日本語世代」である。しかし「黄君」は家業を継ぐことなく、地元での教師の仕事を辞めて台北でサラリーマンとなったことで、父親との折り合いが悪くなっている。

ずいぶん長い間、実家に帰っていない。帰るべきだ。しかし、父はいつ帰ってきたのか、家に帰ってなにをやるのかと聞かだろ。正直に、日本人を連れて礁溪に遊びにきた話をするなら、ああ！そんなことをすることはない。わざわざ、つまらない結果を招きだけだ。あの頃、私は父の代書業を継がず、先生もやめて、その結果、父との間はどうにもなくなってしまう。父に対し、私が台北で仕事をしていて、それが日本人を温泉に連れて行って遊ぶことなどと、とてもいえるものではない。「たとえ黄河に身を投じて、無実の罪をそそぐことはできない」というのではないか。二度とこのことは考えまい。帰らないことだ。

家に帰らないとして、ほかの所へ行けるか。これも同じようなものだろうか。友人に会ったら、なにに帰ってきたか聞かれないだろうか。そうすれば頑固親父に知られる可能性が大きい。そうなったらますますずい。礁溪に帰っていて家に帰らない。父は一昨年こんなふう大声で叫んだのだ。「夏国の禹が治水の仕事をした時、三度家の前を通りながら家に入らなかったという故事がある。おまえはそんなにえらくもないのになぜ家に帰らないのか」²⁰⁾

父親が登場するのは上述の場面だけであり、父親を通して日本あるいは日本統治時代についての語りや描写はない。「黄君」が父親の仕事を継がなかったこと、また父親を避けようとしていることはすなわち、日本統治期およびその記憶との接続を拒否していることを示しているのではないだろうか。

ところが、映画版『莎哟娜啦・再見』（葉金勝監督、1987年公開）においては、小説では登場しなかった父親が日本人たちに向かって日本統治時代の記憶を語る場面が描かれるのである。

ここからはこの映画の製作背景について詳しい田村志津枝『スクリーンの向うに見える台湾：台湾ニューシネマ試論』を参照したい。

1984年に制作が開始された映画版『莎哟娜啦・再見』は2年半かけて完成した。シナリオ制作に加わった黄春明は、制作が開始される前に田村志津枝のインタビューを受け、映画には「主人公黄君の日本人に対する反応の背景」について映画に付け加えたいと話した。²¹⁾

黄春明はそのインタビューの中で、まず「黄君」に「中国人」アイデンティティを根付かせた中学の歴史教師について詳細に語っている。

彼は南京出身で、中国の伝統的な服、長袍を着て授業をした。ある日、近代史の試験に合格しなかった生徒二人が呼び出された。

「君たちは中国人ですか」と訊かれて、生徒たちは顔を見合わせ、はっきり答えない。もう一度訊かれて、

「中国人です」と答えた生徒たちを、日ごろ温厚なこの教師が力を込めて叩く。日清戦争、八年間の抗日戦争、南京大虐殺の歴史を忘れてはいけないと。歴史を忘れたら歴史が民族に復讐する、と。²²⁾

さらに、原作では日本統治期の「抗日」の記憶を語った祖父については日本の敗戦を告げる玉音放送を聞いて「中国人が勝った」と喜んだ、「寺大工で、中国の文化や技術の伝統に誇りを持っている」²³⁾人物であると述べた。

そして、父親は「日本の敗戦を告げる玉音放送を聞いて泣いた」²⁴⁾人物であると黄は述べた。原作では「黄君」が故郷に帰っているのに家に帰らないことを父親に知られることを恐れていたが、映画の中での父親は家に帰らない「黄

君」を叱るどころか、噂を聞きつけ、喜んで自ら出向いていく。そして温泉宿で繰り広げられるどんちゃん騒ぎに顔を出し、軍歌まで歌って日本人にサービスする。ところが彼らに流暢な日本語を誉められると、「小学生時代に台湾語をしゃべるたびに殴られながら日本語を覚えさせられた話を淡々と語る」²⁵⁾のであった。映画版『莎啞娜啦・再見』においては、原作では描き切ることのできなかった日本語世代の父親に日本統治時代の記憶を、しかも暴力という痛みの記憶として語らせたのである。

ただし、上述のような「黄君」の祖父や父親の表象は特殊なものではなく、台湾においては往々にして世代間ギャップとして語られるものである。小説「莎啞娜啦・再見」はどちらかといえば、買春観光という新たな経済的植民を行う日本人の姿を目の当たりにした「黄君」の反応を描くことに重点が置かれ、映画では1970年代初めには十分に描き切れなかった日本語世代の父親による日本統治期の記憶の語りでもって、「黄君」のアイデンティティを作り上げた背景が肉付けされ、補完されたのだと考えられる。前節で論じたように、小説において日本人たちが日本人女性の話す「日本語」はきれいだとやった場面で「黄君」がそれ以上追及できなかったことも、日本統治期において父親と同じような「日本語」経験をしていないこと、またその記憶を継承できていないことの表れではないだろうかと考えられるのである。

5. おわりに

小説「莎啞娜啦・再見」の主人公「黄君」のキャラクターの中には、祖父と教師が語るそれぞれの「抗日」の記憶に接続することによって、それを内面化していく過程において形成された「中国人」アイデンティティが看取できる。その一方で、日本統治期の記憶は「抗日」の記憶と一体化し、語られることはなく、「黄君」自身のアイデンティティ形成には深く影響しなかったように見える。しかしながら、「黄君」の日本人に対する反応には、日本統治期および戦後の歴史が背景にあることを映画版の制作において黄春明は認めている。それらが一度に描き切れなかった理由は、山口守が述べるように、黄春明ら同世

代の歴史記憶の継承の困難さと現実問題にあったと考えられる。

一九六〇年代の台湾は、国民党支配が日本帝国主義統治の植民地体験を負う歴史として清算する中で、経済は輸出主導型の高度経済成長期にあたり、第二次大戦後の台湾社会が都市化し、市民階層が増加していく時期である。そしてこの時期にまた戦後世代が成熟して成人期を迎えるのである。大陸生まれの外省人第二世代であるか、台湾生まれの本省人第二世代であるかに関わらず、この世代は戦後台湾社会で教育を受けて育った点で同じであり、家庭環境や社会階層が異なっても、両者に共通しているのは、親の世代の歴史記憶がしだいに希薄になり、戦後台湾社会に生きる人間としての現実感が大きくなっていくことである。外省人第一世代であれば失われた大陸中国での記憶が、本省人旧世代であれば日本植民地時代の鮮明な記憶が集団的記憶としてあるだろうが、急速に変化していく戦後台湾社会において、第二世代にとってそれらは幼年時代のおぼろげな記憶か、忘却の彼方の記憶か、或いは語られた集団記憶でしかない場合も十分あり得た。本省人であれば、国民党独裁政権下で植民地時代の歴史記憶を負う歴史として清算されてしまう以上、第二世代が現実感をもって記憶継承することは不可能に近くなる。一方外省人であれば、郷土である大陸中国から離れて台湾に暮らす以上、共有すべき集団記憶は常に語られた歴史でしかあり得ない。こうして本省人であるか外省人であるかに関わらず、第二世代にとって、一九六〇年代は歴史記憶の継承よりも、現実の台湾社会で自分が何者なのかという問題の方が大きかった。²⁶⁾

本省人第二世代である黄春明が1970年代初期に「莎啲娜啦・再見」を創作したころもまだ、日本統治期の記憶を描くことそれ自体が、受けた教育の影響や政治状況により困難であり、その体験者である父親を描くすべがなかったものと思われる。それが小説に描かれた「中国人」アイデンティティも、また台湾の現実とはざまで揺らぎ続けるアイデンティティも、さらに映画に描かれた日本統治期に教育を受けたいわゆる日本語世代である父親との関係もすべて戦後の台湾で生きる「黄君」を形作る要素であることが明らかとなった。特に、

父親は「黄君」にとっては忘れることのできない、拒否しきれない存在としてあることが、映画版での描写によって証明されたと言ってもよいだろう。

小説「莎啲娜啦・再見」は植民地統治が終了してもなお、「経済植民地」として台湾にやってきて好き勝手ふるまう日本人たちを批判的に表象する。しかしながら、「黄君」を通して日本人を批判的に描くその根底には、当時の認識として、抗日戦争で戦った敵であるという意識だけではなく、日本の行った植民地統治をも忘れてはならないという思いも込められているはずである。この作品は日本人の蛮行を描くことだけを目的としているのではなく、台湾人の心の葛藤の代弁者である「黄君」というキャラクターを通して、戦後の台湾に生きる人間の複雑なアイデンティティの様相を浮かび上がらせようとしているのだ。

注

- 1) 本稿で引用しているのはすべて福田桂二訳「さよなら・再見」(『さよなら・再見 アジアの現代文学—台湾』めこん、1979年)である。なお、原文については『黄春明典藏作品集— 莎啲娜啦・再見』(皇冠、2000年)に所収されたものを底本として参照した。
- 2) 群ようこ「うちの親に限って」(『本は鞆をとびだして』、新潮文庫、1992年) 60頁。
- 3) 蕭阿勤(和泉司訳)「抗日集团的記憶の民族化—台湾一九七〇年代戦後世代と日本統治期台湾新文学」(呉密察等編『記憶する台湾 帝国との相剋』、東京大学出版会、2005年) 50-51頁を参照した。
- 4) 同注3、51頁。
- 5) 洪郁如『誰の日本時代 ジェンダー・階層・帝国の台湾史』(法政大学出版局、2021年) 15頁。
- 6) 同注5、15頁。
- 7) 同注5、15頁。
- 8) 同注5、16頁。

- 9) 同注3、35-36頁。
- 10) 同注1、12頁。
- 11) 同注1、12-13頁。
- 12) 同注1、11頁。
- 13) 同注1、25頁。
- 14) 同注1、77-82頁から抜粋した。
- 15) 同注1、86頁。
- 16) 同注1、9頁。
- 17) 同注1、13頁。
- 18) 同注1、48頁。
- 19) 同注1、46頁。
- 20) 同注1、64-65頁。
- 21) 田村志津枝『現代アジア叢書9 スクリーンの向うに見える台湾 台湾ニューシネマ試論』（田畑書店、1992年）105頁。
- 22) 同注20、105頁。
- 23) 同注20、105頁。
- 24) 同注20、105頁。
- 25) 同注20、105頁。
- 26) 山口守「解説」（白先勇著、山口守訳『台北人』国書刊行会、2008年）261-262頁。また、黄春明と同世代の作家鄭清文（1932-2017）についても、松崎寛子は「日本統治時代の記憶は「幼年時代のおぼろげな記憶か、忘却の彼方の記憶か、或いは語られた集団記憶」に過ぎなかった。旧国民党独裁政権下で日本統治時代の歴史の記憶が負の歴史として清算されていた以上、日本統治時代に幼年期を過ごした鄭が現実感を持って記憶を継承することは困難であり、それは現実の台湾社会における自己認識に深刻な影響を与えていたのだ」と論じている。（松崎寛子『鄭清文とその時代 郷土を愛したある台湾作家の生涯と台湾アイデンティティの変容』東方書店、2021年）238頁。